

「二銭銅貨」を読む

小酒井不木

青空文庫

「二銭銅貨」の原稿を一読して一唱三嘆——いや、誰も傍にはいなかったから一唱一嘆だった——が——早速、「近頃でない面白い探偵小説でした」と森下さんに書き送ったら「それに就ての感想」を書かないかとの、きつい言い付け。文芸批評と自分の法名ばかりは、臍の緒切つてからまだ書いたことが御座りませぬからと一応御断りしようと思つたところ、オルチー夫人のサー・パーシー・ブレークナーではないが、持つて生れた悪戯気分がむらむらと頭を持ち上げて、大胆にもこうして御茶を濁すことになつたのである。誠に仏国革命政府の眼をくらまして、貴族を盗み出す以上に冒険な仕事であるがせめて地下鉄・サムの「新弟子」位の腕にあやかりたいと思つてはみても、いや、それはやつぱり強欲というもの。

三度の飯を四度食べても、毎日一度は探偵小説を読まねば気が済まぬという自分に、「二銭銅貨」のような優れた作を見せて下さつた森下さんは、その功德だけでも、兜率とそつて天てんに生れたまうこと疑なし。碌ろくに読めもしない横文字を辿つて、大分興味を殺そがれながら、尚おかつ外国の探偵小説をあさつていたのも、実は日本にこれという探偵小説がなかったからである。ところが「二銭銅貨」を読むに至つて自分は驚いた。「二銭銅貨」の内

容にまんまと一杯喰わされて多大の愉快を感じたと同じ程度に日本にも外国の知名の作家の墨を摩ますべき探偵小説家のあることに、自分は限りない喜びを感じたのである。「一班を以て全豹を知る」ということは総ての場合に通用すべき言ではないが、こうして見ると日本にも隠れたる立派な作家があることがわかった。否、まだ外にもあるに違いないということが推定された。それ故、「新青年」の編輯者が、かかる隠れたる作家を明るみへ出そうと企てられたことに自分は満まん腔こうの賛意を表するのである。

芸術の鑑賞と批評——などと鹿しか爪つめらしく言うのも烏お潛こがましいが、優れたる探偵小説なるものは誰が読んでも面白いものでなくてはならない。そして探偵小説は描写の技巧の優れたるよりも筋プロットの優れたるものを上じょう乗じようとすべきであろうと自分は思う。それ故覚束おぼつかない外国語で読んでも、比較的完全にその趣向を味うことが出来るのである。劇とか詩とかは、言葉そのものから、じっくり味ってかからねばならぬのであるが探偵小説には、たとい、今後馬場氏が適切に説破せられたように、人情や風景の描写が多く入って来ても、興味の焦点となるものはやはりその筋書でなくてはならないと思う。この点があればこそこうして自分ごときの素人が、探偵小説に嘴くちばしを入れ得る訳である。

探偵小説の面白味は言う迄もなく、謎や秘密がだんだん解けて行くことと、事件が意表

外な結末を来す点にある。而もその事件の解決とか、発展とかが、必ず^{ナチュラ}自然的でなくてはならない。換言すれば偶然的、超自然的又は人工的であることを許さない。其^{そこ}処に作者の大なる技巧を必要とする。即ちジニアスを要するのである。如何によい題材を得ても、また如何に自然科学に精通しても、単にそれだけでは駄目である。而も題材には限りがあり、又科学的新知識にも、進歩の頂点がある。実際、近頃の探偵小説を見るに大抵どれもこれも題材ががよく似ておつて、これはと思ふ新奇な材料は少いのである。それ故今後の探偵小説家はどうしても筋の運び方、材料の取り方に新機軸を出すより外はないであろう。

こんな理窟を並べると何だか擦^{くすぐ}つたいような氣持になるから、柄^{がら}にないことはまあこれ位にして、さて「二銭銅貨」はどの点が優れているかというに、読者の既に読まれた如く、その巧^{インジニアス}妙な暗号により、只^{ひたすら}管に読者の心を奪つて他を顧^{いとま}みる邊をあらしめず、最後に至つてまんまと背負^{しよい}投を食わす所にある。丁度ルブランの「アルセーヌ・リュパンの捕縛」を読んだ氣持である。銅貨のトリックは外国の探偵小説からヒントを得たのであるかもしれないが、点字と六字の番号とを結び付けた手腕は敬服の外はない。この点は地下のポオも恐らく三舎を避くるであろう。由来日本語を表わす暗号には巧妙なものが少く、この暗号は正に従来作られた暗号中の白眉と言つてよからう。その他筋の運び方、描写の筆致

など、どの点にも間然する所がない。ただ暗号の文字を八字ずつ飛ばして読むと「御冗談」となるという点が少し「偶然」ではないかと思われるが、これはあまりに虫のいい註文であらう。

何れにしてもこの作は近来の傑作である。暗号を中心とした推理小説といえ、先ずポオの「黄金虫」、ドイルの「舞踏人形」、ルブランの「うつろの針」、それからカロリン・ウエルスの「彫ゼ・クレイヴン・クリプトグラムんだ暗号などを思い起すが、この作はそれ等の作に優るとも劣っていない。又暗号そのものから言ってもたしかに優れていると思う。リーヴはなるべく奇抜な材料を得んと心掛けている作家であるが、彼が「アドヴェンチュアレス」の中に入れてある暗号は極めて平凡なものである。ル・キューの「暗号6」ではその解式を示さず、また同じ作者の「不吉フエータル・サーチンな十三」の一篇中の暗号も驚くに足らない。自分は「二銭銅貨」の作者が益自重ますますして、多くの立派な作品を提供せられんことを切望し、それと同時にこの作が他の多くの立派な探偵小説家の輩出する導火線とならんことを祈るのである。

（〈新青年〉大正十二年四月号発表）

青空文庫情報

底本：「日本探偵小説全集2 江戸川乱歩集」創元推理文庫、東京創元社

1984（昭和59）年10月26日初版

1987（昭和62）年2月14日8版

※この文章は底本巻末の「日本探偵小説全集付録」に掲載されています。

入力：小酒井博士

校正：大野 晋

2004年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

「二銭銅貨」を読む

小酒井不木

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>